

出題分析			
試験時間	120 分	配点	学部により異なる
		大問数	3 題
分量（昨年比較）〔減少	同程度	増加〕	難易度変化（昨年比較）〔易化 同程度 難化〕
<p><b>【概評】</b></p> <p>論述字数がそれぞれ 400 字ずつであったことは例年通り。時代・地域では、近世ヨーロッパ、近世・近代ヨーロッパ、近代東アジアが出題された。Ⅰ・Ⅱの出題は例年の傾向を外れてはいないものの、やや時代的に偏っているとも言える。Ⅲは歴史総合を意識して日本史との共通問題となったが、時代や史料を使用した出題、小問を含むなど例年の傾向に服するものとなった。難易度としてはⅡが取り組みにくく、Ⅰが取り組みやすくなったため、同程度と言える。</p> <p>※ 配点は、商学部 125 点，経済・法学部 160 点，社会学部 230 点。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	ウェストファリア条約の内容と影響	解答例では「ウェストファリア条約の代表的内容 3 点」・「ウェストファリア条約の影響」をそれぞれ記述したものと、「ウェストファリア条約の代表的内容とその影響」を 3 点記述したものを併記した。問題文の要求はどちらとも取ることができる。また、前者の解答例では影響の内容を 17 世紀後半から 18 世紀を意識したものとしたが、後者ではより広く 20 世紀までを射程とした。いずれにせよ、領邦がほぼ完全な主権を獲得し、主権国家体制が確立したことは書き落とせないが、こうした説明には近年の国際法研究などから疑問が呈されている。また、解答例に挙げなかった点としてスウェーデンの西ポンメルン獲得とバルト海での覇権確立などを挙げてよいだろう。	標準

設問別講評			
II	市民結社の政治文化史的意義とその限界	「政治文化」という言葉は聞き慣れない受験生も多かっただろう（「政治・文化史」ではない）。解答としては、市民階層が商工業の発達で勃興し、コーヒーハウスやカフェで新聞や雑誌が読まれて世論が形成されるという、18世紀の市民文化の発達についての内容が書ければまずまずだろう。そこから、クラブと、ギルドなどの中近世の中間団体（中間団体は一橋大でしばしば題材とされる）との性質の違いを考えたいが、まずクラブがどういうものかという点が難しい。身分などによる制限が無いことを挙げた上で、限界としては、実質的に貴族や上層市民にしか門戸が開かれていなかったことに言及したい。	難
III	韓国併合と委任統治	概評の通り、歴史総合を意識して日本史との共通問題となったが、近代東アジア史は頻出であるから、その点では問題なかっただろう。1は容易。2は「韓国併合」について、知識を答えるだけでなく、史料からの読み取りを通じてその性格を把握する必要がある。日韓を対等に合併させる、あるいはオーストリア＝ハンガリー帝国のように同君連合にして自治権を認める意見に史料が否定的である点を押さえたい。ここから把握した性格と比較することを意識して、「委任統治」の性格とその背景を述べる必要がある。	標準

#### 合格のための学習法

一橋大学では出題される地域時代がほぼ決まっているので、そうした地域は重点的に学習することが必要だろう。しかし、一昨年度や昨年度のように例年の傾向から外れた時代や地域からの出題がされることもある。なるべく広く学習を深める意識を持ちたい。場合によっては400字以下の論述も出題されるため、大論述に取り組む前のウォーミングアップとして、限られた字数でコンパクトにまとめる演習も役立つだろう。